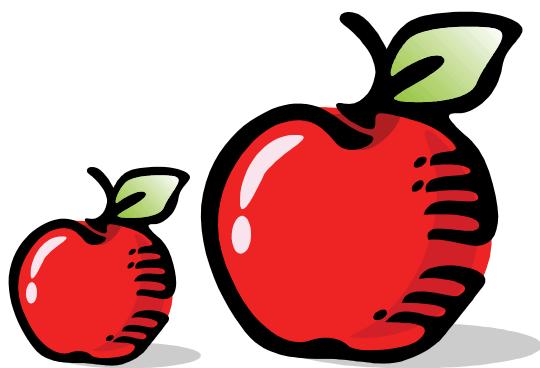


教員のための英語発音教本

発音指導基礎編

[íŋglɪʃ]

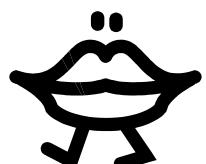


[æplz]

松宮 新吾・Scott Shinall

教職英語教育センター

関西外国語大学



はじめに

「教員のための英語発音教本」（発音指導基礎編）は、小・中・高等学校で英語を担当する教員が、指導者として最小限身に付けなければならない発音技術および発音指導のためのノウハウやスキルをとりまとめたものです。

総務省の構造改革特区申請による小学校での英語教育への取り組みが推進されている今日、最も大きな課題として浮かび上がってきてているのが、指導者の育成と小中学校間の英語教育の連結に係わる問題です。

本書は、小・中・高等学校で英語を担当する教員の英語の発音能力の向上を図るとともに、児童生徒の発音に関する指導力の育成を図ることを目的に編纂したものです。特に発音指導基礎編では、中学校 1 年生の検定教科書（NEW HORIZON English Course 1: 東京書籍）をベースに、指導者として身に付けるべきなければならない正確なモデリングとモニタリングを行うための基礎力を養成することができるよう配慮されています。

また、本書では音声学や音韻論に係わる専門用語の使用は最小限にとどめるとともに、発音時の口の形や舌の位置を明示するために、個々の音について写真や図表を多数用いています。

さらに、日本語と英語との発音体系の比較検証を行う中で、コミュニケーションにおける英語固有のリズムやイントネーションの重要性に鑑み、望ましい発音指導の在り方についても言及しています。

本書を用いた研修では、児童生徒にとって最良の教材は教員であるという観点に立ち、英語の発音に関するよりよいモデルとなることができるよう、一人一人の特性や能力を的確に把握・診断しながら、徹底的なクリニックを行います。

なお、本書で用いた発音記号は IPA (international phonetic alphabet) に準じ

たものですが、アメリカ発音は Kenyon, Knott 共著の米語発音辞典に、イギリス発音は Jones 発音辞典によるものです。

目 次

0-0	英語の発音	p. 1
0-1	表現モデルと認識モデル	p. 4
0-2	発音の指導	p. 8
1	発音器官	p.12
2	調音点	p.16
3	母音	p.18
3-1	単母音	p.20
3-2	二重母音	p.27
4	子音	p.30
4-1	破裂音	p.32
4-2	鼻音	p.37
4-3	摩擦音・破擦音	p.40
4-4	側音	p.49
4-5	半母音	p.51
5	Pronunciation Goals	p. 53

※ 本研修用テキストには、基本語彙や表現をまとめた CD 音声教材と教室英語に係わる CD 音声教材、計 2 枚の CD が添付されています。

UNIT 0-0

英語の発音 English Pronunciation

1. 英語の「正しい発音」

「英語を『正しく発音』する。」とか「『正しい発音』を指導する。」という場合、私たちが学習の対象としている「正しい発音」とはそもそも何なのでしょうか？

また、私たちが目標とすべき英語の「正しい発音」とは一体どのようなものなのでしょうか？

本書では、英語の「正しい発音」についての認識を再確認するとともに、「正しい発音」を指導するために必要なノウハウや指導技術の習得をめざしています。

日本で英語を指導する教員が身につけるべき「正しい発音」とは、一般的には、アメリカ英語、イギリス英語と称されるもので、前者は一般アメリカ語（general American: 最も使用人口が多く、標準的なアメリカ英語とみなされるアメリカ中西部型の発音）、後者は容認発音（received pronunciation: イギリス南部のパブリック・スクールで教育を受けた人々がごく普通の日常会話で用いている発音）に代表される発音であるということができます。

ここでアメリカ英語を選択するのか、イギリス英語を選択するのかということは、単なる指向性の問題であって、最終的な到達目標となるものではありません。どちらかを正確に十分身につけることができれば、それぞれの特徴的な発音をもマスターすることが可能となります。

今日の情報・国際社会においては、テレビ、インターネット、映画等のマス・メディアの持つ影響は大きく、特に VOA (Voice of America) や BBC (British Broadcasting Corporation: 英国放送協会) 、CNN (Cable News Network) 等で訓練を受けたニュース・キャスターが用いている発音は、特定の偏り（粗野さ、卑俗さ、下品さ、なまり等）を取り除いたニュートラルなもので、最も広く普及し、最も多くの人々に理解される発音であると見なすことができます。



現行の文部科学省検定教科書に添付されている音声 CD 等は、米語を主として、登場人物や内容に応じ、英語やオーストラリア英語等での吹き込みが行われています。

さらに、平成 17 年度に実施された、センター試験での英語リスニングテストの吹き込みはニュートラルな米語で行われていました。



「標準」 (standard) という語には、一つの発音を他の発音と比較して優劣の関係があるという価値判断を伴う恐れがあります。そのため、「容認」 (received) という語を用いる場合があります。また、「教育（教養）のある人々」が用いる発音が基本とされる場合には、階級方言 (social/class dialect) の問題が生じることも配慮する必要があります。

2. 指導者に求められる能力

発音指導において英語担当教員に求められる能力は、モデリング (modeling) とモニタリング (monitoring) の 2 つの能力です。

モデリングは、学習者に対し正しい「音」を『聞かせる』とともに、目標とする「音」を発音する際の、唇の形や舌の位置、顔の筋肉の動きなどを視覚的

に『見せる』（示す）ことを意味します。従って、モデリングでは、英語の音を正確に再生する能力が求められます。

モニタリングは、学習者が発音した「音」の正否や質の良否を判断し、学習者に適切なフィードバックや指導を行うことを意味します。そのため、モニタリングでは、学習者が発する英語の音を確実に聞き分け（検聴し）、学習者のつまずき等に対して適切な指導・助言を行うことが求められます。

3. もう一つの文法

一般的に ‘grammar’ というと文法（語順、文構造、語法、統語論、形態論等）と直接的に結びつけてしまいがちです。コミュニケーション（意味交渉）では、双方が共通のベース（規則）を共有していることが大前提となります。ところで、文法にはもう一つの「文法」があると聞くとどうでしょう。円滑なコミュニケーションを行うためには、語彙・表現や文法規則だけではなく、もう一つの「文法体系」を身につけなければならぬのです。

「音法」と呼ばれるものが、もう一つの「文法体系」をなしています。音素レベルの音韻論や音声学、個々の単語の発音だけではなく、メッセージを的確に伝えるための文ストレス、感情や情動を表現するためのイントネーション、ストーリー性を高めるためのインフレクション等が実際のコミュニケーションにおいては特に重要な働きをしています。

日本語を母語とする英語学習者は、日本語の音節拍リズムが、英語の強制拍リズムと干渉を起こしてしまうことに大きな課題を抱えてしまいます。教える立場に立つ者は、このような予測される困難点（trouble spot）を承知した上で、学習者の発達段階に最適化された教授・学習方略を研究・開発することが望されます。

UNIT 0-1

表現モデルと認識モデル Production/Recognition Model

1. 表現モデルと認識モデル

児童生徒に英語の発音を指導する際に留意しなければならないものとして、「表現ターゲット」(production model/target)と「認識モデル」(recognition model)の捉え方があります。これまでの日本の英語教育では「表現ターゲット」と「認識モデル」とを同一視し、アメリカの英語であれ、イギリスの英語であれ、ネイティブの発音、ネイティブの表現を到達目標として設定し、ただがむしゃらにネイティブ・イングリッシュを学習させてきました。本章では、この表現ターゲット」と「認識モデル」とを同一視することの是非について議論を推し進め、何を到達目標として英語を学習させるべきであるのかということについての答えを導き出します。

「表現ターゲット」とは、児童生徒が発信・再生することができるアウトプットとしての表現モデルであり、「認識モデル」とは、児童生徒が受信(認識)・理解すべきインプットのことです。

ここで大切なことは、「表現ターゲット」 = 「認識モデル」ではなく、「表現ターゲット」 ≠ 「認識モデル」であるということです。

2. 妥当な英語

英語を母国語としない学習者が、ネイティブ英語を完全に習得することは不可能であり、また、公教育においては、その必要もありません。コミュニケ

ション能力の育成（意思の疎通を図る）という観点から判断すると、完全な「表現モデル」を学習の到達目標とすることは、学習者や指導者の心理的負担を高め、情意フィルター¹を余計に高くすることに繋がってしまいます。

従って、到達目標とすべき「表現ターゲット」は、（その地域固有の）「**妥当な英語（通じる英語）**」であると定義しても差し支えありません。

次に、「認識モデル」は、狭義では、アメリカ英語やイギリス英語、さらには、BBC や VOA 等の巨大メディアに代表される、世界で最も広く、一般的に用いられている英語を直接的に示すものです。しかし、広義には、非英語圏であるアジア、アフリカ、ヨーロッパ等で用いられている様々な「妥当な英語」を含みます。

以上の観点から、日本人固有の「カタカナ英語」も「表現ターゲット」と「認識モデル」の一部として位置づけることが可能であると推論することができます。しかし、これは「カタカナ英語」を全面的に肯定しているものではなく、『妥当性』を担保した「カタカナ英語」であるということを認識・理解することが大切です。

従って、これから英語を指導する教員が最初に身につけなければならない能力は、「妥当な（通じる）英語」を使い、「妥当な（通じる）英語」を理解することなのです。

ネイティブでなければ、また、外国語（英語）教員の免許状がなければ教壇に立ち児童生徒を指導することができないという懐疑心をまず払拭し、教室内で自らの妥当な英語を操りながら、CD、DVD 教材や外国語指導助手等を補助的、相互補完的に活用することが求められます。そして、指導者としては、学習者

¹ 情意フィルター（affective filer）：学習者の苦手意識や不安感、意欲、学習動機などは、学習効果に大きな影響を及ぼす。これら学習者の情意に係わる要因を情意フィルターといい、情意フィルターが低いほど効果的な学習を行うことができる。（情意フィルター仮説）

にとってよりよいモデルとなるよう、また、学習者のつまずきを的確にモニタ一する聞き取り、聞き分けをすることができるよう、日々研鑽に励むことが大切です。

3. 発音指導の両面性

外国語教育の分野でコミュニケーション能力の育成が重視されるようになってから、発音の指導は文法および語彙の指導と並んで重要なものと考えられ、入門期には特に重要なものと位置づけられています。しかし、このことは同時に多くの問題点を持つものであることも認識しておかなければなりません。

「発音の指導」という場合、音声を発することの指導とそれを「聞き取ることの指導」の両面があることを忘れてはいけません。

正しい発音ができるためには、正確に聞き取る能力が必要となります。すなわち、正確に聞き取ることができないと、自分が発している音声が正しいものか、間違ったものであるのかという判断が困難となり、自己検聴・自己検知（self-monitoring）に支障をきたす恐れが生じてきます。しかし、これと逆の仮説は成り立ちません。すなわち、正確に発音できないと正確に聞き取ることができないという推論です。ある音声を聞き取るために、自分自身が当該の音声を正確に発音できることが絶対の条件にはなり得ないということです。このことは経験的にも実証することが可能です。その良い例が、異文化間コミュニケーションにあります。それぞれ異なる発音体系をもっている英語のネイティブ・スピーカーであるアメリカ人とイギリス人、オーストラリア人、インド人と、非英語圏の中国人、日本人等が英語で意思疎通を図る場合、私たちは一定の困難を感じつつも、ほとんど問題なく相互に理解することができます。このことは、話し手と聞き手が同じ発音体系を共有していなくてもコミュニケーション

ヨンが成立することを示しています。

従って、初期段階の発音の指導においては、良質のインプットを多量に与えつつ、模倣による自らの発音を促し、その発話の質・良否等をモニターとともに、日本語の音声体系との違いを体験・認識させることができるように工夫することが大切です。

特に、指導者として学習者のつまずきや学習上の困難点(*trouble spot*)を事前に予測し、困難やつまずきを少なくする工夫と配慮を行うためにも、日本語の発音と比較して英語の発音にどのような特色があるのかを理解することが大切です。

UNIT 0-2

発音の指導 Teaching of Pronunciation

1. 英語の発音の特色

(1) 音節の構成が不規則である。(音節の組み合わせも順序も一定していない。)

【例】

「スニーカー」 = 「ス・ニ・イ・カ・ア」 (5 音節)

sneaker = sneak · er [sní:kər] (2 音節)

「ストライク」 = 「ス・ト・ラ・イ・ク」 (5 音節)

strike = strike [stráik] (1 音節)

(2) 英語は、高さアクセント (pitch accent) ではなく、強さアクセント (stress accent) である。

日本語は単調平板であるのに対し、英語は強く激しく、抑揚の差が大きい。

英語の発音では特に強勢 (stress) に注意を要します。発音の細かい点で誤りをしても相手に意味は通じますが、強勢を間違った場合には、全く意思疎通を図れなくなります。

【例】

I object [əbdʒékt] to his plan. 彼の意見に反対です。

He is an object [ábdʒíkt] of ridicule. 彼は物笑いの的です。

(3) 英語は stress-timed (強勢リズム) であるのに対して、日本語は syllable-timed (音節リズム) である。

言語のリズム (rhythm) は、音声の流れの中で強い部分と弱い部分とが規則

的に繰り返されることにより作り出される現象のことを言います。一般的に、言語はそのリズムの作られ方で 2 つに分類することができます。一つは日本語に代表されるもので、各音節（syllable）がほぼ等しい間隔で発音されてリズムが作られるもので、音節拍リズム（syllable-timed rhythm）または等時音節リズム（isosyllabic rhythm）と呼ばれます。一方、英語に代表される言語は、強勢（stress）がほぼ等しい間隔で現れることによってリズムが作られ、強勢拍リズム（stress-times rhythm）または、等時間隔リズム（isochronous rhythm）と呼ばれています。

日本語話者が英語を学習するということは、異なったリズム体系の言語を学習することになり、英語のリズム習得は非常に重要な学習課題となります。従って、英語学習初期段階で発音を指導する場合には、個々の音の発音以上に、英語独特のリズムの学習・習得が大切になってきます。

【例】	He	writes a	letter.
	●	● ●	● ●
He	writes a	long	letter.
	●	● ● ●	● ●
He	writes a very long		letter.
	●	● ● ● ●	● ●

上の 3 文は、音節の数がそれぞれ異なりますが、強いアクセント●（強勢）のある音節の数は 3 つと同じであるので、3 文ともほぼ同じ時間で（3 拍子のリズムで）発音されます。従って、弱い音節が圧縮・弱音化され発音されることになります。

英語のリズムは、一定の長さを持つ文のみに現れるものではなく、単語レベ

ルにおいても、強勢（stress）の型が備わっています。このリズムは聞き手が単語の意味を理解する際に重要な働きをするものであるということをしっかりと認識し、指導する必要があります。

(4) 英語固有のイントネーション

イントネーション（音調：intonation）とは、発話における声の高低（pitch）の変動のことをいいます。音の高低と強弱とは異なるものです。日本語、英語にかかわらず、すべての言語の話し言葉にはそれぞれ特有のイントネーションがあります。イントネーションは話者のいろいろな気分・感情・心的状況を表すために用いられるものですから、コミュニケーションにおいて極めて重要な意味を持つものであるといえます。

即ち、イントネーションが異なると意味が違ってくるばかりではなく、不適切なイントネーションを用いると、理解しにくくなり、時には誤解を生じ、悪い印象を与えることになります。特に、イントネーションは感情を表すための言語表現ですから、日本人の「カタカナ英語」の発音は默認することができたとしても、イントネーションを間違えて用いた場合には相手の感情を著しく害する場合があることをしっかりと認識し、学習者がイントネーションの重大な意義を自覚することができるよう指導する必要があります。

【例】

Good morning. ↗ (人に会った時のあいさつ)

Good morning. ↘ (人と別れる場合の言葉)

Good night. ↗ Good bye. ↗ (人と別れる場合の言葉)

※Good night. ↘ Good bye. ↘ と下降調にした場合は「帰れ！」と言う命令、「もうこれ以上話したくない」等の意味を示すこともあります。

(5) 母音よりも子音を多く用いる。

【例】English [ɪŋglɪʃ], nests [nésts], study [stÁdi]

以上、日英の発音体系の比較考察から、発音指導において留意すべき最も重要なことがらは、リズムとイントネーションであるということができます。

日本人の「カタカナ英語」がうまく通じないのは、発音の問題ではなく、リズムとイントネーションが不完全であることがその主な原因となっています。

「妥当な英語」とは、子音や母音等の個々の発音は不完全であっても、リズムとイントネーションがしっかりとしている英語であるということを認識してください。

2. 好ましい発音指導

学習の初期段階では、英語の母音、子音、リズム、イントネーションをそれぞれ別個に指導するのではなく、総合的、統合的に全ての要素を含んだ表現を用い、重点的、系統的に指導することが望されます。特に、イントネーションの指導を行う場合には、適切な状況設定を行うことが重要です。近年の言語習得理論によると、母国語習得の場合には、言語のリズムとイントネーションを習得した後、当該言語の母音・子音の音声体系を身につけるという自然順序仮説が提唱されています。外国語として英語を習得する場合にも、この自然順序仮説は大きな参考となります。

UNIT 1

発音器官 The Organs of Speech

私たちは日常ほとんど意識することなく声を出し（発音し）コミュニケーションを図っています。自分の発話を意識する場面や機会は数多くあります。発話の状況や内容、時間、場所、対象等により発話の声量や速さ等を適切にコントロールしています。また、相手の理解の状況を逐次モニターしながら、特定の語を強く発音したり、ゆっくりと発音するなど、極めて高度なコントロールを瞬時に実行することができます。

しかし、このように複雑な発話による音声の制御を行う中であっても、音素（phoneme）²のレベルを意識したコントロールを行う機会はそれほど多くは出現しません。

² 音素（phoneme）とは、ある言語で使用される音を機能的、意味的、構造的にみた場合の最小単位を意味するものです。英語の *read*[rɪ:d]は[r], [i:], [d]の別個の音がこの順番で並ぶことで *read* 「読む」という意味を表しているのです。この *read* を *lead*[lɪ:d] と比較してみると、[r]と[l]の違いが両者の意味の違いを決定する要因となっていることが判別します。[r]と[l]は、もうこれ以上小さな単位に分割することができないことから、[r]と[l]は異なった「音」の最小単位となっていることがわかります。このように特定の言語において、意味の区別に役立つ音声的最小単位のことを音素（phoneme）と呼びます。

音素を表す符号は // (スラッシュ) を用い、各音素をスラッシュで囲みます。【例】/ r /, / l /一方、辞書やテキストなどで語彙の発音学習・指導のために使用されている符号は、[] で、音声または言語音を示すものとなっています。【例】[rɪ:d], [lɪ:d]

なお、最近の辞書などでは、符号の厳密な使い分けにこだわらず、// を言語音を示す発音記号に用いている場合が散見されます。

1. 音素のレベルでのコントロールを行う事例

【事例 1】

- A : 「今度いつ会える？」
 B : 「うーん、ヨウカ。」
 A : 「えっ、ヨウカ、ヨウカ？」
 B : 「あっ、ヨウカ」

【事例 2】

- A : Do you have the time? 「今、何時？」
 B : Well, it's one 'fiften'. 「えーと、1 時 'fiften'。」
 A : One fifteen or fifty? 「1 時 15 (fifteen) 分？50 (fifty) 分？」
 B : Sorry. It's one fifty, FIFTY. 「あっ、ごめん。1 時 50 (fifty) 分。」
 A : Oh, I missed the bus. Thanks anyway. 「あれー、バスに乗り遅れたよ。
 ありがとう。」

【事例 3】

- A : Now, we must reach the other side of the river.
 「向こう岸まで行かないと。」
 B : I can't swim. 「I can't swim.」
 A : You said can or can't. 「えっ、can て言ったの、can't っていったの？」
 B : I CANNOT swim. 「I CANNOT swim.」
 A : OK. Let's walk down to the bridge. It's a long way, though.
 「じゃ、橋まで歩いていこう。遠いけどね。」

事例で示した状況においては、発話者は各自の発音器官と言語音声に係わる知識、経験や技能を意識的、無意識的に総動員し、正確に意味を伝えるよう最

大限の努力を図ろうとします。

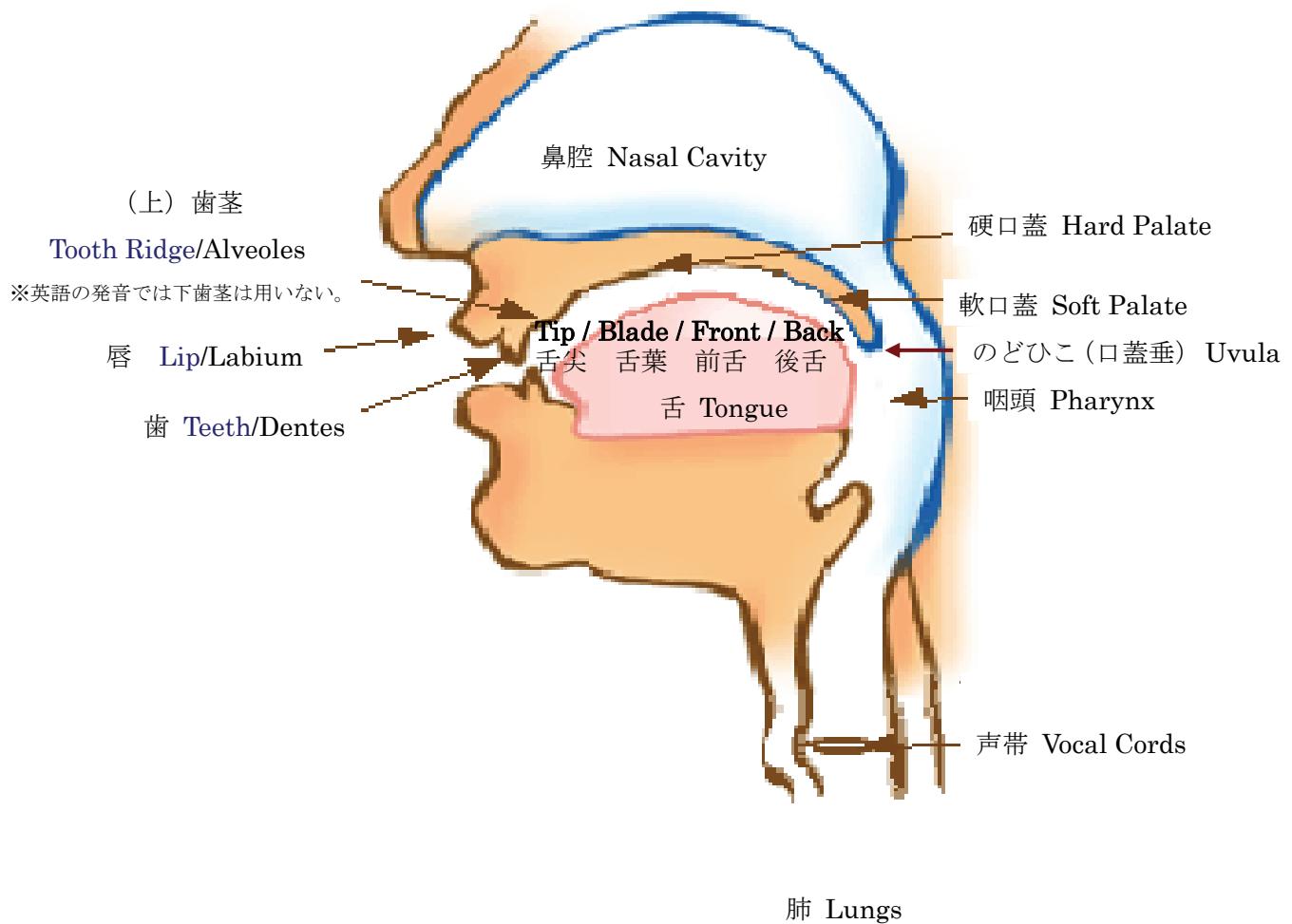
この時の話者 B の姿そのものが、発音を指導する教員のあるべき姿勢を示しているということができます。

すなわち、教える者として、発音器官や目標言語（英語）の発音体系に関する一般的な知識のみならず、日本の学習者が陥りやすい共通の問題点や困難点についての分析・理解とモデリングを主体とした指導方略に係わる技能を身に付ける必要があります。

2. 発音器官 (the Organs of Speech)

人間が言語活動を営むために発する音声を作り出す身体の器官を総称して発音器官 (the Organs of Speech : 図 1) と呼んでいます。

発音器官の中で特に重要な働きをするのが、舌と唇です。その中でも最もダイナミックな動きをするのが舌です。



【図1：発音器官（Organs of Speech）】

指導者として適切なモデルを学習者に示すとい観点から、発音器官を意識する必要が生じてきます。特定の音をどのように発するのか、また、特定の音を発する場合の唇の形や舌の位置はどうなっているのかということを実際に児童生徒の目の前で示す最高のモデル教材が「英語の先生」なのです。英語の先生の存在意義は、このモデリングにあると言っても過言ではありません。

UNIT 2

調音点 Point of Articulation

発音のモデルを示す際に、特に重要になってくるのが、調音（articulation）に対する認識とその正確さです。

調音とは、発音器官がある特定の音を発する際に、必要な運動をしたり、適切な位置に置かれたり、必要な形を作ったりすることを言います。調音は、発音器官の中でも、舌、唇、軟口蓋、声帯の動き、位置、形などの複雑な動きの組み合わせにより行われるもので、特に、これら舌、唇、軟口蓋、声帯は、運動を伴う（動く）発音器官であり、その他の発音器官（上歯茎、硬口蓋等）は固定された（動きのない）ものであるということができます。

ある特定の音の発音を行うために、必要な発音器官がとる特定の位置を調音点（point of articulation）といいます。教員がモデリングを行う場合には、この調音点を視覚的かつ明瞭に学習者に示すことが大切なことなのです。

「舌を噛んで・・・」と言う前に、[θ]や[ð]の音を発音する際の調音点を児童生徒の前で、何度も明確に示し、正確な音を聞かせた上で、模倣練習をさせることが重要です。

日本語の調音点は、5個程度と母音の数が少ないとからも、その許容範囲が広くなっていますが、英語は12個以上と母音の数が日本語と比較して多く、調音点は日本語の時と比べるとかなりピンポイント的なものになります。従って、舌や唇等の発音器官の微妙な位置や動きを身体に刻み込むことが必要になります。

同時に指導者として、特定の音を発音する際の調音点や発音器官の動き、実際に作り出される音を正確に認識し、再現性を高めるよう努力することが求められます。

本書では、調音点を示すために、実際に発音をする際の口の形や、舌の位置等を図や写真を豊富に用いて示しています。練習の際には、モデルを参照しながら、鏡などに自分の口を映して、明瞭な「口の形」を生徒に示すことができるよう工夫してください。

正しい調音点が確認・把握できれば、音の再現性（同じ音を繰り返し再現する）は必然的に高まります。

日本語の3倍程度複雑な音声体系を再現するためには、顔の筋肉のみならず、発音器官を支えている筋肉や骨格等を含め、身体全身を使って表現することが肝心です。



発音器官や調音点を意識した効果的な練習方法は、手鏡を利用し、自分の唇やあごの動き、舌の位置等を逐次確認しながら行うことです。また、発音練習の際に、自分の口元をクローズアップしビデオ撮影したものを、再生しながら発音の矯正やチェックを行うことも極めて効果的です。

UNIT 3-0

母音 Vowel

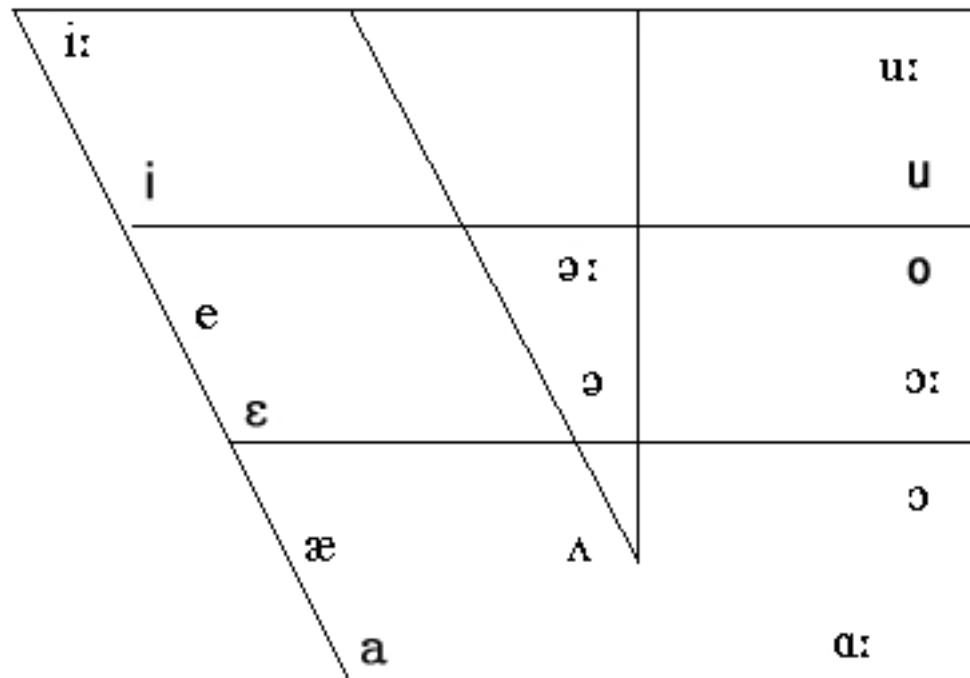
日本語の母音の種類は大別すれば 5 種類（ア・イ・ウ・エ・オ）しかないの で、あまり口を動かさなくても、動かしかたが明確でなくても十分相手に伝わ ります。唇や舌などの発音器官の運動量が少ないので日本語の母音の特色とな っています。

一方、英語の母音は、分類方法や国や地域によりある程度の差があるものの、 12 種類から 15 種類あります。すなわち、英語国民は日本人よりも発音器官を より器用に、より細かく活発に使い分けているわけです。従って、日本人が英 語の発音をする場合には、唇、舌、口等の発音器官のみならず、腹筋や体全体 を活発に活動させ、より強く発音することが求められます。

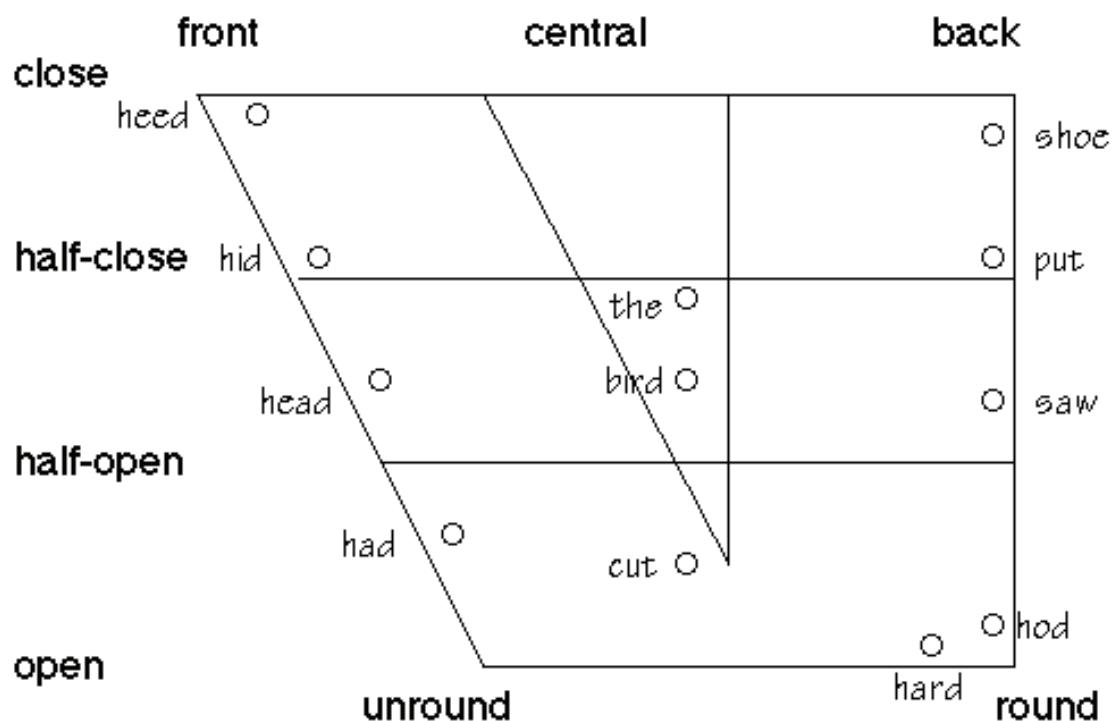
人間の発音器官の生理学・生物学的な構造は全人類共通であるため、練習さ えすれば、どんな外国語でも発音できます。幸いにも、特定の遺伝子情報によ り、発音に係わる能力が規定されているわけではありません。

どんな発音でも、正しい知識と基本訓練を積み上げていけば完全にネイティ ブ・スピーカーと同様の発音をすることは困難ではあるものの、一定レベルに まで上達することが可能です。無意識的な模倣に代表される幼児が行う言語習 得は別として、成人の場合には意識して正しい調音を学ぶことが大切です。

成人が外国語の発音を学ぶ際に注意すべきことは、母国語の中で一番似通っ ている音で安易に代用・転用してしまうことです。外国語の音は日本語とは「似 て非なるもの」という感覚を常に持ち、その違いを体で体感できるような練習 を積み重ねましょう。



【図 2: 英語の母音一覧表 1】



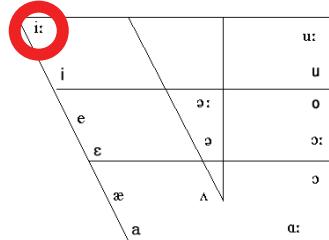
【図 3: 英語の母音一覧表 2】

UNIT 3-1

母音 【单母音】 Simple Vowel

1. week (ウィーク) の (イー) 前母音、閉(狭)母音 Front Close Long Vowel

/ i : /



唇をやや開け、左右に強く開きます。舌の前部を高く上げます。頬の筋肉と舌が緊張している状態を保ちます。そのままで、声を出します。



日本語の「イー」に近い音になりますが、唇が左右に開き、舌がより緊張しています。舌の前部や中央部を上げすぎると口蓋との間で摩擦が生じ、半母音 /j/ の音になってしまいます。意図的に舌の前部・中央部を高くし、口蓋との間で摩擦を起こさせてみましょう。摩擦が起こった状態からほんの少し舌の位置を下げたところが /i:/ の調音点です。

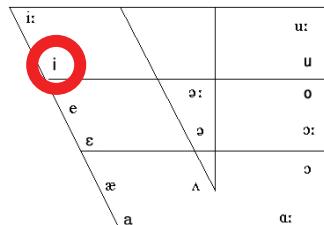
/i:/ は、ラテン語やフランス語からの借用語に多く見られる音です。

2. live(リヴ) の (イ) 前母音、閉母音 Front Closed Short Vowel

/ i /



唇を開け、舌の前部をやや低くし声を出します。



頬の筋肉や舌には力を入れないで、リラックスさせます。



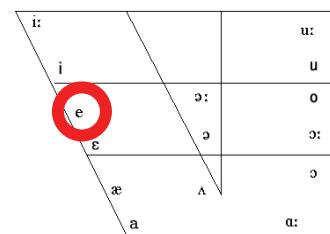
日本語の「イ」と「エ」の中間の音のように聞こえます。

3. egg(エッグ)の(エ) 前母音、半閉母音 Front Half-close Vowel

/ e /



日本語の「エ」よりも少しだけ口をあけ、舌を少し低くします。日本語の「エ」よりは少し強めに声を出します。

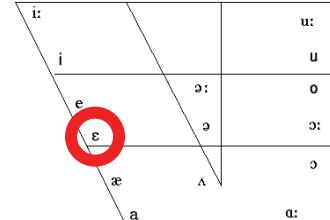


4. bell(ベル)の(エ) 前母音、半開母音 Front Half-open Vowel

/ ε /



日本語の「エ」よりも口を左右に大きく開け、舌の位置もさらに低くします。

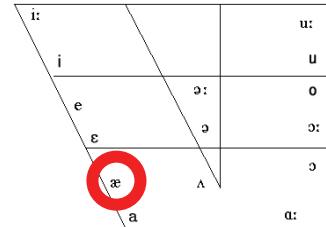


5. apple(アップル)の(ア) 前母音、開(広)母音 Front Open Vowel

/ æ /



日本語の「エ」よりもさらに口を大きく左右に開けます。頬の筋肉がテンションを感じる程度が適当です。舌はニュートラル・ポジションのままで、日本語の「エ」と「ア」の中間の音を瞬発的に勢いよく発します。



発音記号は / a / と / e / の中間音であることを示す形をとっています。

日本語でゆっくりと口を大きめに開けながら「お土産（オミヤゲ）」と発音してみてください。その場合の「ヤ」の母音の音が最も近い音になります。

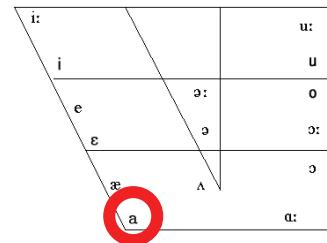
日本語の「ア」の口の形のままで「エ」と発音をしても、近い音を出すことができます。

6. not(ナット)の(ア) 前母音、開母音 Front Open Vowel

/ a /



日本語の「ア」とほぼ同じですが、口をやや大きく開け、舌の位置をやや高めにします。

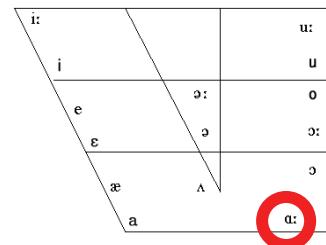


7. father(ファーザー)の(アー) 後母音、開(広)母音 Back Open Long Vowel

/ a : /



口を大きく開け、口の奥の方から声を出します。日本語の「ア」よりももっと舌の位置が低くなります。英語の全ての母音の中で最も舌の位置が低いのがこの母音です。

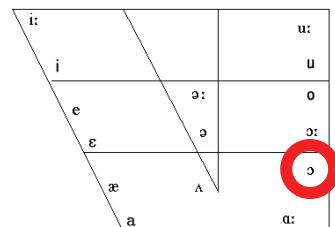


8. body(ボディー)の(オ) 後母音、開(広)母音 Back Open Vowel

/ o /



日本語の「オ」よりも口を大きく開き、唇を丸めて発音します。舌はさらに低い位置にもってきます。日本語の「ア」を発音しながら、口（唇）を大きく丸めると近い音を作り出すことができます。

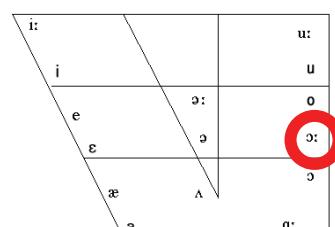


9. all(オール)の(オー) 後母音、(半)開母音 Back Open Long Vowel

/ o : /



日本語の「オー」よりも、唇を丸め、口の開け方をさらに大きくします（顎を下ろします）。舌の後ろ部

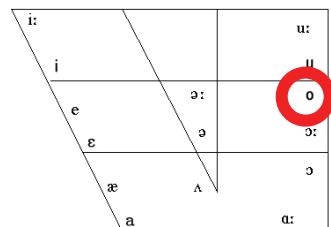


分が高くなり、口の中で音が反響する程度にまで口を丸めます。

10. go(ゴウ)の(オ) 後母音、半閉母音 Back Half-close Vowel

/ O /

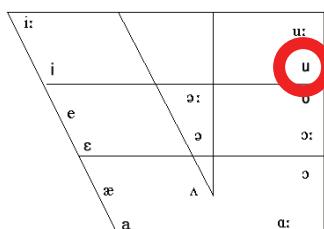
日本語の「オ」を発音しながら、さらに唇を丸めます。
少しこもり気味の音になります。



11. book(ブック)の(ウ) 後母音、閉母音 Back Close Short Vowel

/ U /

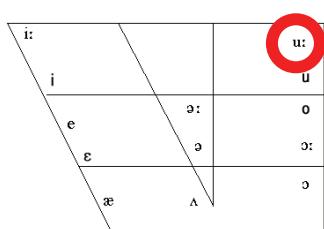
唇を丸めて前に突き出し、「ウ」と短く声を出します。唇の緊張はありますが、舌の緊張はゆるみます。



12. cool(クール)の(ウー) 後母音、閉母音 Back Close Long Vowel

/ U : /

唇を思いっきり丸めて前に突き出します。舌の後ろ部分（後舌部）をさらに高く上げるよう意識しましょう。日本語の「ウー」よりもさらに口を丸め、舌の後ろの部分を一層高くします。

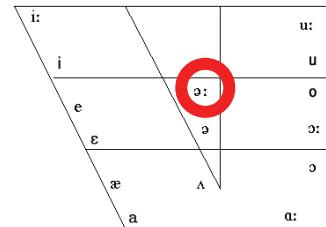


13. bird(バード)の(ア一) 中央母音、半閉母音 Central Half-close Vowel

/ Θ :



口を少し開き、は日本語の「エ」の形を保ち、「ア一」と声を出します。さらに少し唇を左右に引きます。舌の中央部分を少し盛り上げながら発音しましょう。



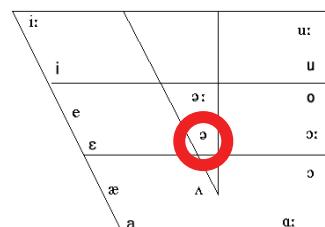
口を開けすぎないよう、また、舌や唇にも力を入れないで、ゆるめた状態で、自然に音を出してみましょう。この音は別名「あいまい母音」(obscure vowel)と呼ばれています。

14. doctor(ドクター)の(ア) 中央母音、半開母音 Central Half-open Vowel

/ Θ /



舌と唇に力を入れないで、口を少し開けて弱く「ア」と声を出します。この音もあいまい母音 (obscure vowel) です。舌全体及び唇を自然に緩ませ、強く発音しないことが大切です。

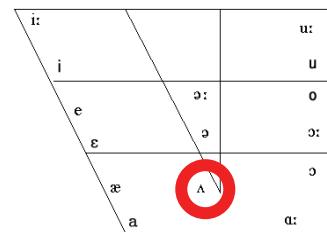


15. sun(サン)の(ア) 後母音、(半)開母音 Back Half-open Vowel

/ **Α** /



口を左右に開き、「ア」と「オ」の中間の音を短く出します。口の奥の方から音が出てくるよう声を出します。舌の後ろの部分を上げますが、舌に緊張はなく緩んだ状態です。



UNIT 3-2

母音 【二重母音】 Diphthong

英語の二重母音は 2 つの母音で構成されていますが、同じ強さの 2 つの音として発音されるのではなく、後ろの母音が弱く短く発音されます。従って、二重母音は下降調になります。

英語には 9 種類の二重母音があり、それらは二つのグループに分類することができます。

(1) 上昇二重母音 Ascending Diphthong (上昇調を意味するものではなく、調音点 (舌の位置) が上昇することを意味しています。)

/ i / に向かう二重母音

/ u / に向かう二重母音

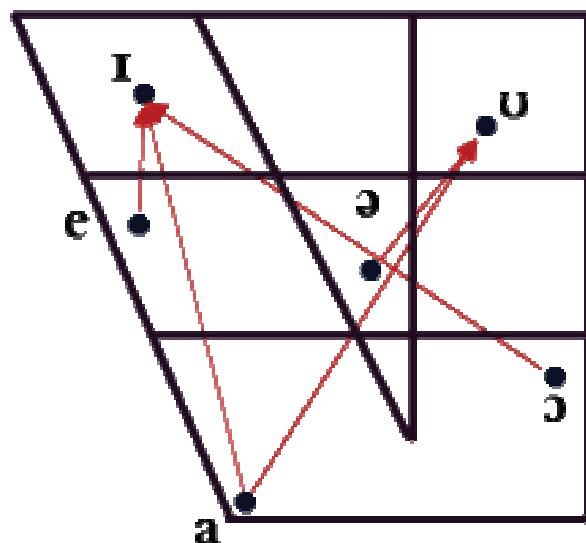
(2) 集中二重母音 Centering Diphthong (二つめの母音が中央母音/ ə /で終わる)

 9 種類の二重母音の発音は全て、最初の母音を「強く」発音し、続いて 2 つめの母音を「弱く添える」、または、2 つめの母音に「弱く移る」ように発音します。

2つの母音を別々のものとして切り離すように発音しないことが大切です。

(1) 上昇二重母音 Ascending Diphthong

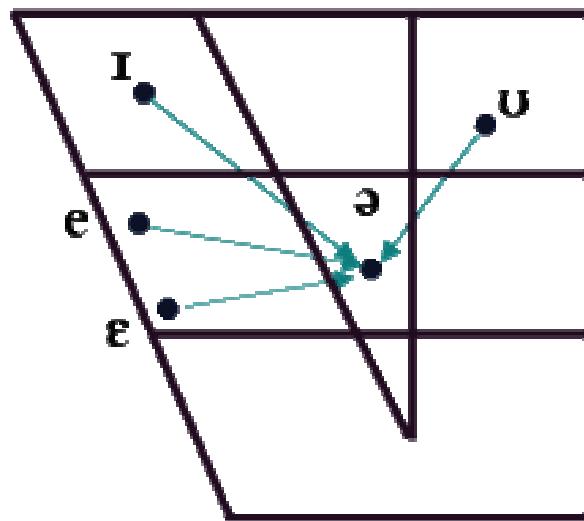
- ① / ei / / e / を強く発音し / i / を軽く添える。
- ② / ai / / a / を強く発音し / i / を軽く添える。
- ③ / au / / a / を強く発音し / u / を軽く添える。
- ④ / ɔi / / ɔ / を強く発音し / i / を軽く添える。
- ⑤ / ou / / o / を強く発音し / u / を軽く添える。



【図 19: 上昇二重母音を発音する時の舌の動き】

(2) 集中二重母音 Centering Diphthong

- ① / iə / 強く / i / を発音し、弱い / ə / の発音へ移動する。
- ② / ɛə / 強く / ɛ / を発音し、弱い / ə / の発音へ移動する。
- ③ / ɔə / 強く / ɔ / を発音し、弱い / ə / の発音へ移動する。
- ④ / uə / 強く / u / を発音し、弱い / ə / の発音へ移動する。



【図 20:集中二重母音を発音する時の舌の動き】

UNIT 4-0

子音 Consonant

全ての音声は、発音器官による障害（妨げ）を受けるかどうかによって 2 つに大別されます。発音器官の妨げを全く受けないで、自由に発せられる音が母音 (vowel) とよばれているものです。一方、発音の際に息が発音器官のどこかの部分で妨げられ、一時的に止められたり、摩擦を生じたりすることにより発音される音が子音 (consonant) です。母音は声帯の振動を伴い発音されるため、全て有聲音 (voiced sound) ですが、子音には有聲音と無聲音 (voiceless sound) の 2 種類があります。



声帯が振動しているかいないか（有聲音であるか無聲音であるか）は、指を喉の両側に触れるか、手のひらで両耳を覆って発音することにより体感することができます。



子音は噪音¹であるか、または噪音を含み、空気の通路の閉鎖や狭めによって発音されます。また、子音の中には鼻音 (/p/ 等) のように噪音を生じない楽音のものもあります。



英語における子音と母音の出現率は、2 対 1 と子音の方が圧倒的に多

¹ 噪音（そうおん） 非樂音（ひがくおん）ともいう。振動が不規則であったり、きわめて短時間しか継続しなかったり、または振動の変化が急速であったりして、特定の音の高さを定められない音。樂音（樂音）は、規則正しい振動を一定時間継続し、確実な音の高さがわかるような音で、振動の変化が緩やかで波形がほぼ規則的、周期的となる。

くなっていますが、日本語では、1対1となります。



英語には、(短)母音が13個(/ɛ/、/a/を加えれば15個)、二重母音9個、子音が24個、計46個の音があります。

有声音 voiced	無声音 voiceless		有声音 voiced	無声音 voiceless
b	p		r	
d	t		l	
v	f		m	
g	k		n	
z	s		ŋ	
ð	θ		j	
ʒ	ʃ		w	ʍ
dʒ	tʃ			h

【表1: 英語の子音一覧表】

UNIT 4-1

子音 【破裂音】

Bilabial Plosive Consonant

1. piano の p, bird の b 両親破裂子音 Bilabial Plosive Consonant

/ p / ▲



両唇を軽く閉じ、一瞬息を止めた後、勢いよく両唇を開いて強く息を吐き出します。息を止める瞬間、腹筋、気道、両唇にかけ強い圧力がかかります。



息の強さを確認するためには、手のひらを唇の手前20cmくらいのところにかざしてみましょう。発音と同時に軽く息がかかるくらいが適当な強さです。



日本語の「パ・ピ・プ・ペ・ポ」と発音した場合には、手のひらまで息が伝わりません。息を両唇で一瞬止めて、勢いよく噴出させるという感覚で練習しましょう。



/ b / ▲

両唇を軽く閉じ、一瞬息を止めた後、両唇を開きながら



声を出します。 /p/ の発音で強く息を吐き出す代わりに声帯を震わせ声を出すと /b/ の音になります。息を止める瞬間は、腹筋、気道、両唇にかけ強い圧力がかかるなどを確認してください。

息の強さを確認するため、紙を唇の手前 10cm くらいのところにかざしてみましょう。発音と同時に軽く紙が揺れるくらいが適当な強さです。

日本語の「バ・ビ・ブ・ベ・ボ」と発音した場合には、紙にまで息が伝わりません。

紙を唇の手前 10cm くらいのところにかざしたままで、/p/ と /b/ の発音を交互に何度も繰り返してみましょう。/p/ の発音の時の紙の揺れが /b/ の時の倍程度であれば、正しい息づかいがされています。一般的に、無声音 (voiceless △) は、有声音 (voiced ▲) よりも大きな呼気の動きを伴います。



/p/ と /b/ の発音を行う際に、日本語の「ブ」/pu/ 「ブ」/bu/ の音のように、母音の /u/ を付けないよう注意しましょう。この「母音を取り去る注意」は、他の子音の発音においても同様に重要なことがあります。

2. tea の t, dog の d 歯茎破裂子音 Alveolar Plosive Consonant

/ t / ▲



唇をやや開きます。舌先を上歯茎に軽くあてて、息を止めます。この時、腹筋から気道、舌先に圧を感じながら、舌先部分で息をせき止めているという感覚が大切です。息を「ハーッ」と吐き出しながら、舌先を上歯茎



につけ、息をせき止めて、舌先で息を止める感覚を確かめてください。

次に、息をせき止めている舌先を瞬間的にゆるめ、息を短く破裂するように吐き出します。



日本語の「タ・チ・ツ・テ・ト」を発音する場合の舌先の位置は、英語の /t/ の発音をする場合と異なり、舌先が上歯の付け根よりももっと下がり、上歯の裏の位置にくるまで低くなり、正面から見ると舌の下半分が歯先からはみ出して見えています。

/ d / ▲



/t/ の発音で息の代わりに声を出すと（有聲音化） /d/ の音になります。

舌先を上歯茎（上歯の内側と上歯の付け根付近）に軽くあてて、息を止めた状態で、声帯に息を送り込みます。「ウー」という低いめき声とともに、舌先にかかる圧力が高まる様子を感じ取ってください。圧力がかかったままの状態で、声を出しながら、瞬間的に息を短く吐き出すと /d/ の音になります。



アメリカ英語では、voiced /t/ は /d/ に近い音となるため、bitter は bidder、water は wadder、atom は Adam のように聞こえる場合があります。

3. king の k, good の g 軟口蓋破裂子音 Velar Plosive Consonant

/ **k** / ▲



舌の後部を高く盛り上げ、口の奥の柔らかい天井部分（軟口蓋）につけ、一時的に息を止める。舌の後部と軟口蓋の部分で息をせき止めている圧を感じ取ってください。次に、息をせき止めている舌の後部を瞬間的に低くし（ゆるめ）、息を短く破裂するように吐き出します。



日本語の「カ(ka)・キ(ki)・ク(ku)・ケ(ke)・コ(ko)」の頭の子音に似ていますが、日本語の場合には舌の比較的中央部分を上げ軟口蓋と接触させていますが、英語の /k/ は、舌の後部を高く上げ、より強く息をせき止め発音する点が異なります。日本語と英語の /k/ を交互に発音し、舌が高まる部分の違いと、息を止める圧力の違いを確認してください。

/ **g** / ▲



舌の後部と軟口蓋で息をせき止めたままで、声帯に息を送り込むと、喉の奥で「ウー」という低いうめき声が出るとともに、息をせき止めている部分の圧力が高まります。次に、息をせき止めている舌の後部を瞬間的に軟口蓋から離し、声を出したものが /g/ の音です。（/g/ は /k/ を有声音化し



たものです。)



日本語の「カ・キ・ク・ケ・コ」(ガ・ギ・グ・ゲ・ゴ)を発音する場合と比べ、英語の /k/ と /g/ は、舌のずっと奥を高くし、口の奥の部分で発音されています(調音点が奥にあります)。



気音(発声) Aspiration

無声破裂子音(/p/, /t/, /k/, /tʃ/)を強く発音すると気音(aspiration)が入ります。日本語では気音発声は元来用いません。従って、英語の発音では、特に腹筋(下腹)に力を入れて強く発声し、気音をはっきり入れる必要があります。なお、気音が入らなくても意義の混同は生じません。英語では有聲音が重要な意味を持つからです。

UNIT 4-2

子音 【鼻音】

Nasal Consonant

1. mother の m 有声両唇鼻子音・Voiced Bilabial Nasal Consonant

/ m /



両唇を閉じ、息を鼻へ送り出します。息が鼻孔から抜け
る音だけがするはずです。息を鼻から抜きながら、声を出
す（声帯を震わせる）と、鼻腔と口腔が共鳴し、/ m / の
発音となります。この時、舌は緊張や反り返り、高まり等
がないニュートラルな位置にあります。



日本語の「マ(ma)・ミ(mi)・ム(mu)・メ(me)・モ(mo)」の頭の子音の発音と同
様です。

 / m /, / n /, / ŋ / の三つの鼻音を発音する際は、軟口蓋が下がり、息が口
腔方向ではなく、鼻腔へ送り出されるのが特色です。他の子音を発音す
る場合には、軟口蓋が上がり鼻腔への通路がふさがれ、息は口腔へと送り
出されています。

2. note の n 有声歯茎鼻子音・Voiced Alveolar Nasal Consonant

/ **n** / ▲



両唇を軽く開け、舌先を上歯茎（上歯と歯茎の付け根付近）にあて、息を鼻から抜きます。息が鼻孔から抜ける音だけがするはずです。息を鼻から抜きながら、日本語で「ン」と発音すると（声を出すと）/n/の音を出すことができます。



日本語の「ナ(na)・ニ(ni)・ヌ(nu)・ネ(ne)・ノ(no)」の最初の子音と同様の発音ですが、英語の発音場合は、舌先が上歯茎にしっかりとつけられています。日本語のナ行の発音では、舌先は「ラ」行の発音時とほぼ同じ位置で、歯茎よりもやや後ろ寄りになります。

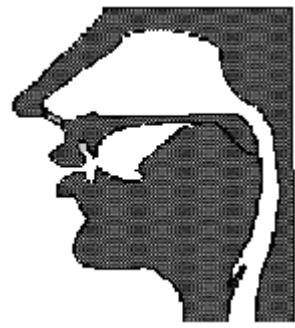
日本語で「ラ・リ・ル・レ・ロ」「ナ・ニ・ヌ・ネ・ノ」と連続して発音し、舌が硬口蓋のどの部分にあたっているのか体感してください。「ラ」行と「ナ」行で舌の異なる部分が硬口蓋の異なる部分に異なる触れかたをしているという微妙な違いを感じ取ることが大切です。「ラ」行の発音では、舌先が口蓋に接しますが、「ナ」行の発音では舌先は口蓋部分に接しません（上につきません）。一方、/n/の発音時の舌先の位置はずいぶん前（上歯茎の付け根付近）になっており、舌先がしっかりと上歯茎に接していることに気づいてください。

3. ink の n 有声軟口蓋鼻子音 Voiced Velar Nasal Consonant

/ **n** / ▲



両唇をやや開け気味にし、舌全体を後ろに引くようにしながら、口舌部分（舌の後ろの部分）を上げ、軟口蓋の後ろ部分につけ、息が口蓋へぬけないようふさぎ、息を鼻から抜きます。息が鼻孔から抜ける音だけがするはずです。



息を鼻から抜きながら、日本語で「ン」と発音すると（声を出すと）鼻腔が振動し /n/ の音を出すことができます。

/n/ の音を発音するときの舌の位置と両唇の開き加減は /k//g/ の時とほぼ同じです。舌の後部の盛り上がりが /n/ の時はやや大きくなっています。

 日本語の「蓮根」「銀行」「損害」の発音には /n/ の音が含まれています。日本語においてどのような場合に /n/ の音が発音されるのか規則性を見いだしてみてください。

UNIT 4-3

子音 【摩擦音・破擦音】 Fricative/Affricate Consonant

1. five の f、voice の v 唇歯摩擦子音 Labiodental Fricative Consonant

/ f / △



上歯が下唇の後ろの部分に軽くあたるようにつけたままで、上歯と下唇の隙間から息を出します。「フーッ」という摩擦音が /f/ の音です。さらに「フーッ！」と息を強く吐き出すと、上唇と上歯の間に空気が入り込みます。



舌は、ニュートラル・ポジションに位置しています。



一般的に、/f/ の発音に関しては、「上歯で下唇を噛むように」と指導されますが、「噛む」という表現は好ましくなく、「下唇の後ろの部分に軽く触れる」という表現がふさわしいものです。

日本語の「フ」の最初の子音部分の発音と /f/ の発音は、唇の形を含め、全く異なったものであることを両方の音を繰り返し出すことにより体感してください。

/ V / ▲



上歯が下唇の後ろの部分に軽くあたるようにつけたままで、上歯と下唇の隙間から息を出しながら、声を出します（声帯を震わせます）。

舌は、ニュートラル・ポジションに位置しています。



 /f/ と /v/ の音を発音するときに、頭頂部に手のひらを軽くあててみましょう。/f/ を発音するときには手のひらには何も伝わってきませんが、/v/ を発音するときには振動（頭蓋骨が振動する様子が）が伝わってくるはずです。有聲音を発音するときは、必ず声帯の振動が伝わり、頭蓋骨が振動します。有聲音化が正しく行われているかどうかをチェックする際の指標にしてください。

 /v/ をカタカナ表記する場合、「バ・ビ・ブ・ベ・ボ」ではなく「ヴァ・ヴィ・ヴ・ヴェ・ヴォ」を用いることがあります、これは日本語と英語との音の違いを意識したものです。

【例】バイオリン//ヴァイオリン violin /vaiəlin/

2. stop の s、zero の z 齒茎摩擦子音 Alveolar Fricative Consonant

/ **S** / ▲



両唇を軽く開け、舌先を上歯茎に近づけるように上げ、舌先と上歯茎の間から強く息を吐き出し「スーッ」というヒス音 (hissing sound) を発します。舌先は上歯茎や硬口蓋の一部に触れてはいけません。持ち上げた舌先と上歯茎の間を勢いよく呼気が通過するという感覚が大切です。



日本語の「サ・(シを除く)・ス・セ・ゾ」の頭の子音に似た音ですが、

日本語では下歯の裏側に軽く触れる程度に舌先を下げて発音します。

/ **s** / は、舌先を上げて上歯茎に（つけないで）近づけて発音します。舌先を上げた場合と下げた場合（日本語式）の違いを体感しましょう。

/ **Z** / ▲



両唇を軽く開け、舌先を上歯茎に近づけるように上げ、舌先と上歯茎の間から強く息を吐き出し「スーッ」というヒス音 (hissing sound) を発しながら、声を出します（声帯を震わせます）。



日本語の「ザ・ジ・ズ・ゼ・ゾ」の頭の子音に似た音ですが、日本語で

は下歯の裏側に軽く触れる程度に舌先を下げて発音します。 /z/ は、舌先を上げて上歯茎に（つけないで）近づけて発音します。舌先を上げた場合と下げた場合（日本語式）の違いを体感しましょう。



/ts/ /△/ /dz/ /▲

舌先を上歯茎につけ、/ts/ は /t/ と /s/、/dz/ は /d/ と /z/ を別々にではなく、一息で一緒に強く発音する。

練習の際には、/t//ts/、/d//dz/、/s//ts/、/z//dz/ の音をそれぞれ連続して発すると舌先の位置や、歯茎との接触を確認することができます。特に、「ツウ」「ズウ」のように、子音の後に母音 /u/ が入り込まないよう注意しましょう。

3. thank の th, the の th 齒摩擦子音 Dental Fricative Consonant

/ θ /



舌先を上歯の先端の内側につけ、舌先と上歯の隙間から息を吐き出し、強い摩擦音を作り出します。最初は、上歯と下歯で舌先を軽く挟むという感覚ではじめ、次第に上歯の先端のやや裏側に舌先がつくように練習しましょう。



/θ/ は日本語には無い音です。舌先の位置がポイントになります。舌先が奥に下がりすぎると /s//z/ の音になります。また、「舌を噛んで発音する」という表現は誤解を生じる可能性があるので、「舌先を上の歯の

先端の裏側につける」という感覚を持たせることができるように指導します。

/ ð / ▲



舌先を上歯の先端の内側につけ、舌先と上歯の隙間から息を吐き出し、強い摩擦音を作りながら、声を出します（声帯を震わせます）。



 /ð/ は日本語には無い音です。舌先の位置がポイントになります。舌先が奥に下がりすぎると /z/ の音になります。

4. shop の sh, rouge の ge 齒茎硬口蓋摩擦子音 Alveo-palatal Fricative Consonant

/ ſ / ▲



唇を丸め前に突き出します。舌の前部を上歯茎の裏または硬口蓋の前部に近づけ、舌の前部と上歯茎の裏の隙間から「シッ！」と強く息を吐き出します。



 日本語の「シ」の子音は唇を突き出さないで発音され、息を吐き出す力もそれほど強くはありません。

/ 3 / ▲

唇を丸め前に突き出します。舌の前部を上歯茎の裏または硬口蓋の前部に近づけ、舌の前部と上歯茎の裏の隙間からと強く息を吐き出しながら、声を出します（声帯を震わせる）。



/ʃ/ も /ʒ/ もフランス語からの借用語に多く見られる発音です。どちらの発音においても、舌先（舌の前部）は歯茎の裏や硬口蓋にはふれ合わないよう注意することが大切です。

5. kitchen の tch、Japan の j

歯茎硬口蓋破擦子音 Alveo-palatal Affricate Consonant

/ tʃ / ▲

両唇を軽く開け、舌先を上歯茎の付け根付近につけ、舌の前部を持ち上げるようにしながら息を止めます（/t/ と同様の位置）。瞬間に舌先を離し、強く息を吐き出します。



日本語の「チ」の頭の子音に近い音ですが、より強く息を吐き出します。また、日本語の「チュ」とは全く異なった発音であることに注意してください。「チュ」は唇を丸め、舌先は上歯茎にはつきません。また、それ

ほど強く息を吐き出すことはありません。

/ d ʒ / ▲



両唇を軽く開け、舌先を上歯茎の付け根付近につけ、舌の前部を持ち上げるようしながら息を止めます（/d/と同様の位置）。瞬間に舌先を離し、強く息を吐き出しながら声を出します（声帯を震わせます）。



 日本語の「ヂ」の頭の子音に近い音ですが、より強く息を吐き出します。

また、日本語の「ジュ」とは全く異なった発音であることに注意してください。「ジュ」は唇を丸め、舌先は上歯茎にはつきません。また、それほど強く息を吐き出すことはありません。

6. rain の r 有声歯茎摩擦子音 Voiced Alveolar Fricative Consonant

/ r / ▲



唇を少し開け、両唇をわずかにすぼめるようにします。舌先を少し内側上向きにそらすようにし、上側の歯茎の奥側に近づけ、舌先と歯茎の奥側の隙間から息を軽く吐き出しながら、声を出します（声帯を震わせます）。





日本語の「ラ・リ・ル・レ・ロ」の発音は、舌先が一度上歯茎や硬口蓋前部につきます。

「巻き舌」の /r/ という表現も誤解を生みがちです。唇を軽く丸め舌をニュートラルポジションに置き、声を出してみましょう。「ア一」と「ウ一」の中間のような音が出るはずです。そのままで、舌先を少し持ち上げましょう。少しこもったような音に変化します。この音が /r/ です。（舌先が口蓋や上歯茎に触らないよう注意しましょう。）

語頭の /r/ を発音する場合には、軽く「ウ一」（犬のうなり声のような低い音）と言いながら発音するとスムーズに /r/ を発することができます。日本人の英語の発音に対するトラウマ (**trauma** / **traumə** / / **trɔ:mə**/) の代名詞的な存在である /r/ も、恐れる必要はありません。コミュニケーション活動は具体的な状況や文脈の中での意味交渉ですから、レストランで焼きめし (**fried rice**) を仮に '**Fried lice, please.**' / **fraid lais, pli:z**/ と注文したとしても、シラミの天ぷらが出されることはないでしょう。大切なことは、その場での意味交渉の在り方です。相手が怪訝な表情をしたときに、補足説明をしたり、別の表現で言い替えたり、絵を描いたりするといったコミュニケーション方略の能力が問われることになります。

/r/ には、国や地域により様々な変種が存在します。米国、英国、豪州の英語にも大きな差があります。米国では半母音的に多用されますが、英國南部では語尾や子音の前の /r/ はしばしば省略されます。

7. heart の h 無声声門摩擦子音 Voiceless Glottal Fricative Consonant

/ **h** / △



唇は自然に開け、舌はニュートラル・ポジションに置きます。口をぽかんと意識しないでだらしなく開けている状態です。そのまま、喉の奥から腹筋を使い、短く息を吐き出します。吐き出された息の音が /h/ の音です。



 日本語の「ハ・ヘ・ホ」の頭の子音がほぼ /h/ と同じ音となります。なお、日本語の「ヒ・フ」の音は /h/ とは異なります。「ヒ」は舌と硬口蓋の間で、「フ」は丸めた唇の間で摩擦が起こることにより発音されます。

UNIT 4-4

子音 【側音】 Lateral Consonant

1. look の l 有声歯茎側音 Voiced Alveolar Lateral Consonant

/ l / ▲



両唇を軽く開け、舌先を上歯茎につけ、舌の両側から息を出します。息を強く出すと頬の肉の部分が振動し、軽いヒス音 (hissing sound 「スー、スー」という音) が生じます。息を舌の両側から送り出しながら声を出すと（声帯を震わせると） /l/ の音を作り出すことができます。



2種類の /l/ の発音

/l/ は、単語のどの部分に現れるか、また、その前後の音との連続性や関係により、2種類の異なる発音がなされます。

(1) Clear (クリア) /l/

舌先は上歯茎につき、舌の後ろの部分（後舌部）が下がります。また、舌先へのテンションはかなり高くなり、しっかりと上歯茎にくっつけます。

【例】 live /liv/, leaf /li:f/, lake /leik/

(2) Dark (ダーク) /l/

舌先は上歯茎よりもやや後ろよりの硬口蓋の部分につき、舌の後ろの部分

(後舌部) がやや盛り上がり、唇は Clear (クリアー) /l/ の時と比べ、やや丸くなります。

【例】 field /fi:l^d/, fill /fil/, people /pi:pl/

- (3) milk の発音は、特に幼児期に顕著であるがダーク/l/が用いられます。milk /milk/ /miuk/ /mɔk/ それ以外にも、self や film 等も同様に /seuf/, /fium/ と発音されます。

UNIT 4-5

子音 【半母音】 Semivowel

1. woman の w 有声両唇軟口蓋半母音・Labio-velar Semivowel

/ **w** / ▲



唇を丸め、前に突きだします。舌の後部を高く持ち上げ軟口蓋に近づけ、瞬間に丸めた両唇をゆるめ（左右に引き）ながら、短く「ウッ！」と声を出します。持ち上げた舌の後部と軟口蓋後部との隙間で息を吐き出すときに摩擦音が生じることを体感してください。



日本語の「ウ」よりも強く唇を丸め、前に突き出します。

/ w / と / j / は単なる子音ではなく、母音に近い性格を持っているので半母音(semivowel)といい、/ w / と / j / の次にくる母音により発音が決定されます。

2. yes の y 有声硬口蓋半母音 Palatal Semivowel

/ j /



両唇を自然に開きます。舌の中央部を高く上げ、硬口蓋と軟口蓋の境目辺りに触れるくらい近づけます（舌が口蓋に触れてはいけません）。上げた舌と口蓋との隙間から息を吐き出しながら、声を出します。日本語の「ユ」に近い音が出ますが、声帯にはかなりの圧力がかかります。



日本語の「ヤ・ユ・ヨ」の頭の子音に近い音になりますが、もっと強く息が吐き出されます。/j/を発音するときの舌の位置は全ての音の中で最も高い位置にきます。

また、/j/は日本語の「キャ」/kja/、「ミヤ」/mja/の音の中に含まれています。

UNIT 5-0

Pronunciation Goals

What goals should be set for individual learners or groups of learners? How 'good' should the learner's pronunciation aim to be? Whereas some time ago it might have been said that the goal should always be *native-like pronunciation*, even though it was realized that this would be achieved by relatively few, most people now think that this is an inappropriate goal for most learners. The great majority of learners will have a very practical purpose for learning English and will derive no particular benefit from acquiring *a native-like pronunciation*.

There will be some learners, however, who may want to approach a native-like accent because their work requires them to deal on equal terms with native speakers in an English-speaking country or abroad. In this case, we must use criteria which are occupation-related. Learners who plan to become teachers of English will want to approximate a native accent and, depending on their future teaching situations, may want to be familiar with several of the major accents of English in the world. Learners who want to work as air traffic controllers or telephone operators, for example, will need to have a pronunciation which is easily understood in less-than-ideal conditions. In these situations there is a limited opportunity for repetition and second tries; indeed, these can be dangerous.

In many countries English has a particular role as the language of communication between people who are speakers of the different indigenous languages. The multilingual nations of India and Africa are good examples of this. These speakers of English as a second language may have a restricted audience; they will be using English only with other non-native speakers and therefore a pronunciation which is native-like is totally inappropriate. However, it must be accepted that, if there is occasion to speak with natives, the divergences in pronunciation may lead to communication breakdown.

While native-like pronunciation may be a goal for particular learners, and while we should never actively discourage learners from setting themselves 'high' goals, for the

majority of learners a far more reasonable goal is to be *comfortably intelligible*.

First, let us focus on the word '**comfortably!**' It is significant that in English and many other languages we can make a distinction between 'hearing' and 'listening'. Hearing requires mere presence plus ears, listening requires work; we can ask someone to 'listen carefully' and accuse someone of not listening to what we have said. We all realize that some people are more difficult to listen to than others, and when we listen to a foreigner speaking our native language we expect to have to work a little bit harder. But if we have too hard a time - if the person pronounces in such a way that we have to constantly ask for repetitions - then at some stage we reach our threshold of tolerance. We become irritated, and maybe even resentful of the effort that is being required of us. In some cases we may be willing to be patient and ultra-tolerant, in some cases we may have to be (for example, if the speaker has hold over us, such as a customs official at a border control), but for the most part we expect conversations with non-native speakers to be 'comfortable'. In setting goals for our learners we must consider the effect of mispronunciation on the listener and the degree of tolerance listeners will have for this.

Then, what about '**intelligibility?**' Very few teachers today would claim that a pronunciation that is indistinguishable from that of a native speaker is necessary or even desirable for their learners. Instead, it is generally accepted that intelligibility is the most sensible goal. But what is meant by intelligibility? Here is one definition: 'Intelligibility is being understood by a listener at a given time in a given situation'. So, it's the same as 'understandability'.

Substituting one word for another usually doesn't get one very far, let's try for a more operational definition, one that we can 'put to work': 'The more words a listener is able to identify accurately when said by a particular speaker, the more intelligible that speaker is.' Since words are made up of sounds, it seems that what we are talking about is the issue of equivalence of sounds. If the foreign speaker substitutes one sound or feature of pronunciation for another, and the result is that the listener hears a different word or phrase from the one the speaker was aiming to say, we say that the foreigner's speech is unintelligible. Likewise, if the foreign speaker substitutes a sound in a particular word, but that word is nonetheless understood, then we say the speech is intelligible.

Kenworthy, Joanne. (1987) *Teaching English Pronunciation*, New York: Longman

UNIT 5-1

Vowels and Consonants

The set of phonemes consists of two categories: vowel sounds and consonant sounds.

Vowel sounds are all voiced, and may be single (like /e/, as in let), or a combination, involving a movement from one vowel sound to another (like /e/, as in late); such combinations are known as diphthongs. An additional term used is triphthongs which describes the combination of three vowel sounds (like // in our or power). Single vowel sounds may be short (like //, s in bit) or long (like //, as in beat).

Vowels are produced when the airstream is voiced through the vibration of the vocal cords in the larynx, and then shaped using the tongue and the lips to modify the overall shape of the mouth. The position of the tongue is a useful reference point for describing the differences between vowel sounds.

Vowels are articulated when a voiced airstream is shaped using the tongue and the lips to modify the overall shape of the mouth. English speakers generally use ***twelve pure vowels*** and ***eight diphthongs***. If you try saying /ɪə/ /ʊə/ /eə/ /eə/ /eɪ/ /ɔɪ/ /aɪ/ /əʊ/ /aʊ/ out loud, you should be able to feel that your tongue changes position in our mouth, yet it doesn't actually obstruct the airflow. Try moving smoothly from one sound to the next, without stopping. You will also be aware of the shape of your lips changing, and your lower jaw moving. It is these basic movements which give vowels their chief characteristics.

Consonant sounds may be voiced or unvoiced. Consonants are formed by interrupting, restricting or diverting the airflow in a variety of ways. (Manner of articulation: plosive, affricate, fricative, nasal, lateral, approximant, place of articulation: Place of articulation: bilabial, labio-dental, dental, alveolar, palato-alveolar, palatal, velar, glottal, and Force of articulation; fortis or strong, lenis or weak) It is possible to identify many pairs of consonants which are essentially the same except for the element of voicing (for example /f/, as in fan, and /v/, as in van).]

Vowels		Diphthongs		Consonants			
i / i:	b <u>e</u> ad	e i	c <u>a</u> ke	p	p <u>in</u>	s	<u>s</u> ue
I	h <u>it</u>	ɔ i	t <u>oy</u>	b	b <u>in</u>	z	<u>z</u> oo
ʊ	b <u>oo</u> k	a i	h <u>igh</u>	t	t <u>o</u>	ʃ	<u>she</u>
u:	f <u>oo</u> d	iə	b <u>eer</u>	d	d <u>o</u>	ʒ	me <u>as</u> ure
ɛ / e	l <u>e</u> ft	ʊə	f <u>ewer</u>	k	c <u>ot</u>	h	<u>he</u> llo
ə	a <u>bout</u>	eə	w <u>here</u>	g	g <u>ot</u>	m	<u>mo</u> re
ɜ:	sh <u>ir</u> t	ə u	g <u>o</u>	tʃ	ch <u>ur</u> ch	n	<u>no</u>
ɔ:	c <u>all</u>	a u	h <u>ou</u> se	dʒ	j <u>udge</u>	ŋ	<u>si</u> ng
æ	h <u>at</u>			f	f <u>an</u>	l	<u>li</u> ve
ʌ	r <u>un</u>			v	v <u>an</u>	r	<u>re</u> d
a/a:	f <u>ar</u>			θ	th <u>ink</u>	j	<u>y</u> es
ɔ / ɒ	d <u>og</u>			ð	th <u>e</u>	w	<u>wo</u> od

* The symbols used throughout this textbook are those of the International Phonetic Alphabet.

* For the vowels (where there are some differences) the equivalent symbols are used.

* The boxes containing unvoiced phonemes are shaded.

**UNIT
5-2****Stress, Rhythm, Intonation**

The sounds can be significantly affected by vocal features known as stress, rhythm, and intonation. These vocal features help to convey meaning and must be used correctly if you are to be completely understood.

Stress is the first vocal feature we will deal with. Speakers must stress certain syllables in words; otherwise the words would be misunderstood or sound strange. For example, improperly placed stress when pronouncing invalid (a chronically ill or disabled person) may make it sound like invalid (null; legally ineffective). Stress can also change the meaning of a sentence. "I saw a movie" is different from "I saw a movie." "He won't go" implies a meaning different from "He won't go." In English, proper use of stress enables you to clearly understand the difference between such words as the noun present (a gift) and the verb present (to introduce; to offer).

Rhythm is the second feature we will present. Rhythm is created by the strong stresses or beats in a sentence. In many languages, the rhythm is syllable timed. This means that all vowels in all syllables are pronounced almost equally. Syllables are rarely lost or reduced as they are in English. For example, a three word phrase in your language is not likely to become two words. In English, "ham and eggs" is squeezed into two words, "ham'n eggs." This reduction results because English has a stress-timed rhythm. This means that its rhythm is determined by the number of stresses, not by the number of syllables. English speakers slow down and emphasize heavily stressed words or syllables. They speed up and reduce unstressed ones. For example, the five-word phrase "I will see you tomorrow" may become "I'll seeya t'morrow."

Intonation is the final vocal feature you will learn about. Intonation patterns involve pitch and are responsible for the melody of the language. Speakers frequently depend more on intonation patterns to convey their meaning than on the pronunciation of the individual vowels and consonants. For example, in English, the same words can be used to make a statement or ask a question. If your vocal intonation rises, you are asking a question: "He speaks English?" The sentence "That's Bill's car" becomes the question

"That's Bill's car?" when you raise the pitch of your voice at the end.

So now you can appreciate the common expression, "It's not what you say, it's how you say it!"

Although your English grammar might be perfect and you might be able to pronounce individual sounds correctly, you will still have a noticeable foreign accent until you master the stress, rhythm, and intonation patterns of English.

UNIT 5-3

Sentence Stress

Stress patterns go beyond the word level. Just as it sounds awkward to stress the syllables in a word incorrectly or to stress them all equally, it sounds unnatural to stress all the words in a sentence equally or improperly. Effective use of strong and weak emphasis in phrases and sentences will help you achieve your goal of sounding like a native English speaker.

Possible Pronunciation Problems

English sentence-level stress patterns may not be used the same way as in your language. In English, specific words within a sentence are emphasized or spoken louder to make them stand out. ("It's not his house; it's her house.") Your language may use its grammar instead of word stress to convey the same meaning. Consequently, you may be confused about when to use strong stress (and when not to use it!) in English sentences.

Using the stress patterns of your native language when speaking English will contribute to your foreign accent.

1. If you place the stress on the wrong word, you will:

- a. completely change the meaning of your statement.

"He lives in the green house" (the house painted green) will sound like

"He lives in the greenhouse" (where plants are grown).

- b. distort your intended meaning of the sentence.

"Steve's my cousin" (not Sam) will sound like

"Steve s my cousin" (not my brother).

2. If you give too much or equal stress to unimportant or "function words":

"I'm in the house" will sound like "I'm in the house."

"He's at the store" will sound like "He's at the store."

Words Generally Stressed in Sentences: Content Words

Content words are the important words in a sentence that convey meaning. We

normally STRESS content words when speaking. Content words include all the major parts of speech such as nouns, verbs, adjectives, adverbs, and question words.

Words Generally Unstressed in Sentences: Function Words

Function words are the unimportant words in a sentence. They don't carry as much meaning as content words. We normally do NOT stress function words when speaking.

Function words include the following parts of speech:

- | | |
|------------------|------------------------------------|
| 1. Articles | the, a, an |
| 2. Prepositions | for, of, in, to, etc. |
| 3. Pronouns | I, her, him, he, she, you, etc. |
| 4. Conjunctions | but, as, and, etc. |
| 5. Helping verbs | is, was, are, were, has, can, etc. |

UNIT 5-4

Rhythm in English

The rhythm of conversational English is more rapid than that of formal speech. Every spoken sentence contains syllables or words that receive primary stress. Certain words within the sentence must be emphasized, while others are spoken more rapidly. To keep the sentence flowing smoothly, words are linked together into phrases and separated by pauses to convey meaning clearly. Effective use of rhythm will help you to achieve more natural-sounding speech.

Possible Pronunciation Problems

In many languages, all vowels in all syllables are pronounced almost equally. Syllables are rarely lost or reduced as they are in English. It is likely that you are using your language's conversational rhythm patterns when speaking English. This habit will contribute to a noticeable foreign accent.

1. If you stress each word equally or too precisely:

"He will leave at three" will sound like "He will leave at three."

2. If you avoid the use of contractions or reduced forms:

"I can't go" will sound like "I can not go."

"He likes ham'n eggs" will sound like "He likes ham and eggs."

3. If you insert pauses incorrectly between the words of the sentence, you will distort the meaning of your sentence and create a choppy rhythm.

"I don't know Joan" will sound like "I don't know, Joan."

Contractions are two words that are combined together to form one. Contractions are used frequently in spoken English and are grammatically correct. If you use the full form of the contraction in conversation, your speech will sound stilted and unnatural.

I'll (I will), you're (you are), he's (he is), we've (we have), isn't (is not)

UNIT 5-5

Intonation in English

When speaking, people generally raise and lower the pitch of their voice, forming pitch patterns. They also give some syllables in their utterances a greater degree of loudness and change their speech rhythm. These phenomena are called intonation. Intonation does not happen at random but has definite patterns which can be analyzed according to their structure and functions. Intonation is used to carry information over and above that which is expressed by the words in the sentence.

Intonations has several conceivable patterns in the spoken form of a language which are usually expressed by variations in pitch, loudness, syllable length, and sometimes speech rhythm.

Intonation patterns have grammatical functions. They may show that an utterance is a question and not a statement.

e.g. Ready?

Intonation patterns give additional information to that given by the words of an utterance.

e.g. I STUDIED English. (it was doubtful whether I did)

Intonation patterns indicate the speaker's attitude to the matter discussed or to the listener.

e.g. I TOLD you that.

Intonation patterns often differ between languages or even between varieties of the same language, e.g. between Australian English and American English. In some communities, there is a difference in the intonation patterns of different age groups or speakers of different sex.

There are several different purposes of the uses of intonation in English.

1. Intonation is used to put certain words in the foreground. Speakers use pitch, along with volume, extra length on the vowel to give words prominence or stress.
2. Low pitch is used to put things in the background, to treat something as old or shared information.
3. Intonation is used to signal ends and beginnings.
4. Intonation is used to show whether a situation is basically 'open' or 'closed'. It may

be unresolved, or incomplete, or ‘open for negotiation’ or confirmation, in which case a high or rising pitch is usually used.

5. Intonation is used to show involvement. This involvement may be emotionally highly charged, as when a speaker’s voice jumps up in pitch because of anger or excitement, or it may be interest or commitment.
6. Intonation is used to show expectations. The best example of this is the use of tag questions. If we say; ‘You don’t know, do you?’ with a falling pitch on the tag, this shows we expect the answer to be: ‘No, I don’t.’, i.e. confirmation or agreement.
7. Intonation is used to show that one speaker respects or cares about the other (especially as regards his or her status or feelings). e.g. ‘Excuse me.’
8. Intonation is used to show the relationship between the parts of a speaker’s message. Are things essentially the same, or different? In other words, speakers can show whether one point follows automatically from another, or whether it is a new dimension, or perhaps a summary of what has gone before, i.e. ‘the same’. Here’s an example.

UNIT 8

Japanese English Learners

Apart from problems with consonants, vowels, Japanese English learners face critical issues in English pronunciation. They are issues regarding rhythm and stress, consonant clusters and sequences.

1. Rhythm and stress

In Japanese each syllable is given equal stress, so a word of four syllables will take twice as long to pronounce as a word of two syllables. Learners may have great difficulty with the characteristic rhythm of English with its alternation of stressed and unstressed syllables. It is interesting to note how English-speakers cope with familiar Japanese names. Hiroshima, for example, is alternatively pronounced with stress on ‘-ro-’ or on ‘-shi-’, but the Japanese pronunciation has equal stress on each of the four syllables.

Likewise, the Japanese learner may pronounce ‘Birmingham’ as ‘Baa – mi – n – ga – mu –’ with equal stress on each syllable.

Mistakes in placement of stress in words and in sentences are frequent. (The latter arises because of the difficulties learners have in understanding the link between stress placement and meaning in sentences.)

2. Consonant clusters and sequences

Japanese has very few clusters of consonants. The normal patterns of syllables are C-V-C-V or C-V-V (the latter in syllables with the double vowels). So sequences and clusters of consonants in English will cause extreme difficulties.

The dominant strategy for Japanese English learners is known as ‘Katakana English’ where they insert vowels between consonants to break up the cluster. The learner may pronounce ‘screw’ as ‘su-ku-ryu’. In words or syllables that end with a consonant, a vowel may be inserted after the final consonant as well, so ‘steak’ may be pronounced as ‘su-tee-ki’.

These problems learners have need to be given high priority because they are vital for ‘intelligibility’, others do not affect ‘intelligibility’ and can be given low priority. In general, the areas of rhythm, word stress, and sentence stress are high priority areas for all learners.



関西外国語大学